

911.3

ホ

下

波句集

鳳朗發句集下

立秋

秋の部

為よしハ秋也書ハら立夏め
秋立也書ハら立夏め
秋立乃秋ハ立夏ハ日の出
心ハら立秋乃立夏ハ
蚤取て為よし秋ハら立夏ハ

秋



冬に夜も雪はくはり及水も

自然よりあれりゆかち

とて記す

初秋や新白秋さへ見えたりなるを

宵物と来て初秋と来りたり

しら秋やたし近付の空を

初秋より夕のきて泡の流れり

秋書

夕物秋よりうらうらと見えたるを

福書 秋書

福書よりとる。瀬戸の粒舟より

福書やまより。珠をくさるの魚

甲物そ射の西より瀬のつる鳥

薦あはせ地はむひていきるひあり

氷粒消て八瀬津魚に生かす

某の家は秘蔵の書も是は傲て

いまむひの福書けすや瀬のおこ

福つきの書定むるは秋の書

冬に及ぶと水は凍り及水は

自然に凍りぬるるの如し

と云ふ

初秋や初霜の如き(見出し)を云ふ

宵物と来て初秋を来りたり

しら秋やたしとけの空を

初秋より夕のきて泡の流れる

秋歌

夕物秋より夕のきて泡の流れる

稲妻 秋歌

稲妻よりとるく。激風の如き

稲妻や夕より。珠をくさすの如

甲物を射の如く。白濁の如き

蒼鳥は世に悲ひて。いきりひあり

氷柱消て。八流津魚。其苦味

某の家は。秘蔵の如く。是は傲て

いさむひの稲妻のけすや。流のおこ

稲妻の如き。定むる。如く。いさむ

すれあはれや春の雪ももる秋の雪

七ノ五川

棚たのや近江のたの川

羈旅

柳もさやまかたをといふたはら

板中よも見つゝのひさし星の空

星名成まゝのうきや男

手なけし雲のまゝもをの川

面をかたし玉織やうかす

月の光る山さへ見えぬ 氷河

魂棚 魂登

魂棚とのと見えたるは月より物

ころとあつたて成あつて玉糸

魂の味し 露はまらせ 露ひそり

燈籠 孝子

簾笠の向ふ方 燈籠の影

めくらせはつと本ひのく切落

中不スリ 城志あつた子や孝の市

施係鬼

七月十六日若原の御より伊豆の
國へさき浦との限り浪打摩よ
あやまり庭の藤屑と成し合
糸を甲ふそ、澄粧係鬼と書
す成見て

施係鬼火や不二紙厚地は駿河濱

涌

えらりの一休は這入をさり外
水の香踊あそび灰玉なり
涌子や真目よなり書よなり
扇周扇置

妙別

庭より二白もよき別種うね
控際もたてておえちる 周扇外

露

白露の深はさわかちるなり

光ののち、霞あり、霞の中

の石の一、子もふいよまあふ

若草、夕、あつち切草

あふた、百、城、志、海、袖、の、霞

秋日 秋夜

ゆ、う、ま、ま、空、ひ、く、秋、の、日、さ、ー、し

秋、の、夜、は、あ、げ、を、む、く、星、火、は

秋風

月、の、白、の、向、名、し、一、光、秋、の、の、勢

光、よ、吹、毛、の、と、ハ、ナ、り、ぬ、秋、の、風

ま、き、時、も、吹、ハ、ふ、を、た、れ、秋、は、風

志、ハ、ら、久、ハ、り、り、秋、の、の、勢

秋、風、の、昔、さ、麻、呂、を、り、餅、り、を、金

林、の、風、火、下、も、水、下、を、な、う、を、り、

源、の、百、夜、波、よ、て、ら、白、ハ、つ、程、を、よ、さ

よ、ま、り、な、な、我、思、ハ、出、て

秋、極、し、秋、風、き、え、や、涼、ニ、泊

秋水

暁の灯は際より除く秋の水

橋の原より大井川を望みて

鳥形より空のたへえて秋の鳥

冷

方ハぬき紙のより更なるき

冷清くも夜の下の旅の垢

相一葉

虫のちとて推し相一葉

たこまわして水ゆらぬ一葉の如

散柳

秋中よ采きりもなりちる柳

木槿

古を嘆むる心さしなりてをたさ

木槿よりえり吾翁のいさ

のりなり

かえり家やもたまらざる木槿

つらたらく木を采きけり木槿の如

物を捨くもえり木槿の如

稲

酒折(ヤ)

苗取て取よハ菜取多稲の露

物魚

薺の物てをいももせきりなり

物可不也いふ物見ても味をこり

あさ魚の葉おしりり也その側

物このおれと葉もふ不こり(能き魚)

活やりの秘多そそ人の結人

名(ヤ)

薺の水物て味てまわさきり

物う不やおりの蔓てハ味たらん

藤袴

あふさせりつうそて昔也藤そこり

め即(ヤ)

老りても木り折たーめ良き

おろくそまや嵐おをこちり

そそまの旨ひも黄なりめり

芒

浮山寺の心地はせぬやめ良し
月より一立ぬるる留るる娘初志

うちよきハ茶病のともやせらる那

ぬいもとの通より拵ふすき代

疲るはれりり合ぬ 芒草

二見法浦ふて

おまけハ庭り傳りすきの種

初の旅葉よん一きちるやうよ

萩

あふんを破れ移るるこいれと

系も今もたれとささひをきや

又まう代のうらけをきひら

ちんちん

ゆすすこやすきりうらまを茶

おのの茶のさえてかんとすきや

日影の萩よりまあるゆまの那

もりし一茶を起す如極の萩

採題より高き者もふ成りて

る去状より定まりてあり萩の

ひそせ余りの松よりよみま

くわらる実のちまきやうり草

一葉安れまきりたれ心よく

そ達のつゝまきやすむ

萩のまきり株もたうらけ露のそ萩

萩 雀麦

七月あ。松樹の浦邊よ萩遊す

桔梗

ありぬ火やまのつゆても萩のまき
かゝるや、初色てい見りらに

揺らまより桔梗のふかひき水

白いのういとい見ゆる桔梗の如

中めて見くまき桔梗の答この如

萩花

ゆれまのうら白てまきり萩の花

萩の花輪を見れはまきり

子や色折よこの程ハをちもたの

芭蕉

程の糸の傘おさるうたをせ成水

系瓜 秋茄子

ひりつ程し臨まらもせぬ系瓜菜
実ひんよきをまうなり秋茄子の

番椒

唐からーまらーき色ハたろろをり
茶打けり古酒さを尻唐らー

蟋蟀

折くハまらしれもたけ茶
傾け、おの目よまきりくは
鳴うちハか一つて隙に蟋蟀
長鳴のすりよりよたろぬまりしは

松平四六子竹をさうて一程をすま

さましりの初歌をよと曲名をよ

のして浮せらるるそ音流りて

笛をたをるのめりーつる

深戸碧の裏志忍更をきりけ

秋標

黄青らぬいまはさし——と秋の標
るやきり——と標花す秋のてふ
かききり——と秋の標

秋標欄

秋のいささきもなれて志にそく
午睡す深より始へん来り安
蕉翁の像成る不圖と来て

高水をとてさする時夢さあさ

町ありと名し——と夢と秋の標
標ありとせしと欄より来り

秋標 巻

秋の標也故にまき——と秋の標
ぬれきりし秋の標の言ひ来り

略

己の秋さすとも来り来りの略
立解の引張——と来り来り

新 賜

変てハナクハ子ハ心ヲ取 新賜の古也
一聲ハ賜ハ引ハリハ子ハ来

新

新子指さハリハ子ハ来ハ子ハ来
之新ハ子ハ心ハ子ハ心ハ子ハ心
空きハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
麻子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
之新也新ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハナクハ子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
磁山子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

葉山子 鳴子

ハナクハ子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
ハナクハ子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
ハナクハ子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心
ハナクハ子ハ心ハ心ハ心ハ心ハ心

ハ 新 賜

ハ朝ハミヨウキノツレ梅の花

初月

初月や数日たきこ極ぬ休

待宵

あはれその名月すまうあのを宵

夕日の月

きらきらと空を照らす夕日の月

居ても寝てもどりのうれい夕日の月

夕日せせぬ 夕風さ知今夕月

名月

名月か今夕りの空やうやくし

名月一足もきハ木の石も

名月の枝いかりする夕影の

名月や夕やうて仕舞夕陽

名月と夕影も夕影を宵に

名月や月夜をよハ眼もあふ

名月や夕影を夕影と夕影

名月や夕影を夕影と夕影

魚形村浪あたりと云ふ山の

やう城残せりやうたり

名目や玉のあり一石の後の

めい月の秋をよらさぬおちり

名目雨

名目や雨の秋のあそび

雨の雨の雨の雨の雨の雨

名月たるをきつたる心

秋月

ちりめらら秋あつきて秋の月

おとろくや秋もあそび秋の月

一秋やあつた夜をら秋の月

仲秋世目

再一庭やをりし秋の月

晴をまらだのしを来ぬ目たる

目

すまの川を極きりやうたり

夕陽よのそをくしうたり

結句錢あすう 管のせく目口式

竹林の清光魚目下見え

ちきそまきちうそり

足ゆきしん / 今もかると 語らばと

新目

枝のうせて 粗のま籠を木のり式

目を新しき 掃ひきり 四つの海

陶庵

小車や巡りそうせて 目より遊

川原より 竹を釣目の ねんご那

うけりさきり さらぬ水とむ目粗式

校む ぬみ取涼目の ち紙新

えんをちんく 足そ厚目の かきき足

隣りても 目の漏る 為新しうあむ

一、あ子を懐か

まより やあぬの 目如的 石ん

十六夜

いさよあ我 結ひきもな 秋の月

十の程やんらーとよハハハハ
ワキアヤ行て日暮てもよかー交
十の程の白きつと題して
らんらきよまつき宵にあり傘の下

星月夜

雪音残るやーと結句

せよこつやー

星をかりてはよふ雪程はかきうら
ものつそぬ計興うつー也星月夜

長夜

さむしろよをれものいそむ程を
なまの甲よ耳ハヤエを夜の長き
夜を

よきましまんあきハ夜をきかろめ
かけろふのよきよとわらぬ夜をう那
夜をさやゆーしてやれ納屋の銀
人聲は交の志まぬ夜をう那
獨りおと夜をきハたりー互佐の聲

何そこらこねれさやうを救うに

野分

熊五の堀をたると野分
おやうとて目つき居野分

秋夕

十重せ重望のさうに秋乃若
世より回ハせよとて秋の夕
秋の之様きのやれ息もつきあは
棟と只見えせて秋の之様

秋の暮あまうりやて若もせは
櫛りのこりのなは秋の心之成

砧新酒

酔さ者の涼てぬけりきぬさう物
うら若う陰日向あす砧の如
○ちのめうら酒振てはる新酒成

落木

のりを見れはさうな落木
干川迄さうのちあり落木

木屏

老婦名舎

木屏也、藪野と云流の通ふ所

柿梨

回所聖堂の傍りにある

位名は、柿梨あり、柿梨名

柿梨名とおもひ合す

柿の木也、柿梨の、柿梨の、柿梨の、柿梨の

人の来て、柿梨の、柿梨の、柿梨の、柿梨の

蕎麦 松茸

唐土の、蕎麦、蕎麦、蕎麦、蕎麦

蕎麦、蕎麦、蕎麦、蕎麦

夏科を、蕎麦、蕎麦、蕎麦、蕎麦

焚、蕎麦、蕎麦、蕎麦、蕎麦

松茸、蕎麦、蕎麦、蕎麦、蕎麦

乃 渡り

乃、乃、乃、乃、乃

乃、乃、乃、乃、乃

茶

為ちまや訪へては初野の浦
一の末ては茶や宮の書さ茶
と来とも見まうけたりぬ為す一
はつそきてはゆやまのふたは石
せりくそ親の通言や渡り言
朝のハまうちもせまとも茶の昔
茶見よや茶のさけ九のふ那
茶のまおまの茶のまけり

茶提さるのふまの白ひかり
手入一甲一樽の茶の茶
茶崎也た松の中のみくの茶
茶のまき茶化りまうねお露

お毛人旅報

硝子の障おもまうまきの茶
夫を茶一の茶茶化て茶を

后月

後の月心細き一見の

書空の押えて居るや後の月
等閑におもひの月の後乃月
池のまゝ古くもては店ある
木母ち菜店

河辺宮

文政五年九月神尾の

何れより松屋にて

河辺宮の古き涼亭一うね

紅葉

太くや蒼人 夢成からりき

未だ道うて 赤うらぬお茶うね

友よりやい 赤うけのよきお茶

築ちりり 赤くちきちちり

茶をくれ 赤もつすお茶

赤の身ておー やるも

戸隠山下

橋の名より なるてお茶

やちを好まよ由館の合祀場

まき松送了り一合をさうり一合

かりたる心さうりたてて

冬之うらもあまうさな秋の紅葉式

祖のあつる神をかくこまうりて

神のたれおき町をり野ハ錦

未枯

うら枯や布施の魚買小高人

未枯や東成とすれ一東云

行秋

行秋の冬ア来ても秋のふき

り秋やひそり松種り幾回り

秋名所風煙多秋

病中

うき林の音まふふ秋名所うら

春聖屋多をを訪せ給ひ

冬名所

沸きの町る秋風煙の冬秋名所

九月夜

詠

さうけやや大松畑の九月夜

咲き成社の調めて曲り

むらやまうなまをくどらひさき

虫の蔭の庭うあまる

玉をうのこまをちりて雲よ

さよのそやうりけゆれをまじり

世りもてまやしてまをた

とらめををきりしき

野ををりし秋をいそり木の葉

お付りし見を交りし九月

孫弓や板下もさけり秋の夜

天國の夜古

水音やゆきし秋の木の果

戸鴨の木ぬ先らの森を来

賀

戸鴨の歌とををりし秋の夜

冬の部

初冬

冬は初冬の出く回一高き形

神世目

冬は初冬の出く回一高き形

冬は初冬の出く回一高き形

小春

冬は初冬の出く回一高き形

冬は初冬の出く回一高き形

冬日を海

冬の日はもつと白雲の晴るる那
蒼うても枯ぬけてあり冬の海

亥日

由玄猪や嵐の葉よめりきん
瘡瘡外北福よりうらま亥のふか

初時面

空めたりき古のなまらこ燈初時面
やき成すけくしてを向時雨

日のあがり善くともう珍を向時面

森心より存分降しぬを向時面

なるうりき又久らけり初しを

時雨會

々よりしゆふのまら猪して初時面

小夜の中よそ

暮ふしと石も今の泣きやを向時面

時面

降らぬ日の程定まらぬ時面

分ちりしるや下は時をよかす
現中る百より音絶えし時を武
志之れ川をのく是之を曲りて
時をすする前とわらふもあらず
延くねうては甲斐なき時を来
志つてと来さのりぬるしと終り
東麓に城柵きちと古園と題す
うるかおなきう時を一月の松
時を會

木枯

うかひて 硯斎らぬるしと終り
深川の是 景 時を たり
花亭大の神 賛

かへて 世を留まらぬ神の時を

風や大和の地もそまわり
木枯の水海をる 雲きう那
松つとく木からしと石ニよみり

冬目

火のほを踏もきす枯野原
冬籠りを採

眺らりのふかきや等より冬籠り
一をいり日のさす屋根をり冬籠り

多くの人を深木をいん

ありり

冬籠りよりいれを向るよりよまてり

解りよふの笑はし冬籠り

うらひすの好よまのせぬをり

火桶火狩

為人と住りいれきる火桶

籬にきて浮きのとれり火桶

埋火

うつこきり一尾取けて森より

埋火の灯を深くむより

炭

とちをきやうたきり炭こうちり炭

炭火の火を不より

捐

燈をきく二存より一捐本は
ひる柱をさう、細りする捐本は

蒲團

爪先で裾巻をむやうするふこ
ゆふも煮、懐もあつたふこ、
さすも煮、懐もあつたふこ、
敷方の物もあつたふこ、

納豆

却のち、此をうゆ、納豆、
暖味、ふけて納豆、うつや、一

靴

靴とす、た、力を、た、た、

十夜、清取越

炭つ、つ、つ、つ、
秋、秋、秋、秋、

麦探

之は、清の、積

二百餘といふ也袖先の雪の
ほちくそ雪うつ雪のこ帯の如
雪のう(系て見らば)系ら雪の
雪の中此雪見付しうひつ松
臨(二)雪先(三)雪也(四)雪の
ちをけちるく(五)雪の詠め
起まつて雪の中(六)雪の家
起さる(七)雪の(八)雪也(九)雪の
雪の人(十)雪の(十一)雪の(十二)雪の

雪の(十三)雪の(十四)雪の(十五)雪の
大雪の(十六)雪の(十七)雪の(十八)雪の
雪の(十九)雪の(二十)雪の(二十一)雪の
雪の(二十二)雪の(二十三)雪の(二十四)雪の
雪の(二十五)雪の(二十六)雪の(二十七)雪の

朗詠

雪の(二十八)雪の(二十九)雪の(三十)雪の
雪の(三十一)雪の(三十二)雪の(三十三)雪の
雪の(三十四)雪の(三十五)雪の(三十六)雪の
雪の(三十七)雪の(三十八)雪の(三十九)雪の
雪の(四十)雪の(四十一)雪の(四十二)雪の

病中

雪の(四十三)雪の(四十四)雪の(四十五)雪の
雪の(四十六)雪の(四十七)雪の(四十八)雪の
雪の(四十九)雪の(五十)雪の(五十一)雪の
雪の(五十二)雪の(五十三)雪の(五十四)雪の
雪の(五十五)雪の(五十六)雪の(五十七)雪の

氷

弦音もなき越の沙汰の氷

撓

撓やめまのけいこ

散茶

よる見舞にちる散茶

あちちのらつそりのつもみち

茶をまじり散茶の

茶

一日古たてて歴代もて茶葉の如
神事もあそびの遊茶葉

茶幻住庵

名のない茶とひらもなき茶葉
わらわのぬけぬもつ茶葉
ねすのらや茶葉の香も

茶店

この中茶葉をいり茶葉
茶のいり茶もつ茶葉

木茶

さる木の茶系を志りてはなうりまきり

茶門整月影庵ひらきまきり

うらまものまきりて送る

たかむや木の茶のまきりてまきり

復也

うらまむきりてまきりてまきり

たのまきりてまきりてまきり

祖のまきりてまきりてまきり

枯柳

隠る枯の茶まきりてまきり

塚の酒前よすまきり

穴のまきりてまきりてまきり

孫のまきりてまきりてまきり

いらぬ枝ハ茶まきりてまきり

傾城の枯てまきりてまきり

枯まきりハ茶まきりてまきり

冬枯茶

恙や梅見ぬ里此等の 梅
その梅義理しとて打より
贈言本出と

きり人よ先一枝や冬のうめ
日の本や梅葉のひらき
冬枯るの身とておもしろ

枯尾花

かろくこーと白和なり枯尾花
おきて許てはるぬ枯尾花

芭蕉忌

夢を種り 然して枯し尾花
鎌倉よりふ道のとて

川原りわすくお橙(り)枯尾花

枯菜枯葉枯萩

白菜やおめはおえき枯る
野の冬枯葉は枯つて萩の萩
春のハチマツハチマツは萩枯葉

水仙

水仙の空きこりきりを候し
根阿やま水仙下留此流うの
多仙や播道了茶と世疾もの
水仙也む好明子のよもつけに

大根引

よみの園おのりや大根引
千鳥

啼也むよ根一程うら千鳥う那
うぞて居を懸りなうふふ鳥成

やてま(居)に根のふふ鳥成
先一の末て種をふる千鳥水
ふ鳥やうく家も三の四ツ女川
ちらららと居来さきりや川ふ鳥

水鳥

五鳥の心着たは口や心軒家
水鳥や兵士一鳥もせは

鴨

鴨の音く入亭よりうの月夜成

鴛鴦

云付と正ひの末ぬや鴨の春
暗くや鴨鳴方のしらき
見さよりおれ少階し鴨の春
小一町門多き春も鴨の春
鴨ぬ鴨もより春つ門田水
病床春佳
折くや鴨正付の鴨の春
をのの鴨春志のひやうも春なり

鶺鴒

鶺鴒の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
尾の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
之を春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
おれをれし春の鶺鴒の春

木兔

木兔の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
木兔の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
木兔の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春
河豚の春の鶺鴒の春の鶺鴒の春

河縁さげの性もまろく
おつそれと一分も延ぬ生海蔵兼

杜父魚

杜父魚の危すききちの級や空すのめ

綱代

か之下と一糸量如綱代より那

夜真引

吐するわ手品もつるや夜真引

冬玉

り水のゆくまきりせて冬玉より那
待て居て忘きをみるや冬玉の目

神楽 馬火焼

くらこの里紙面の見て居る神楽
そり居たりすはもうをた小ね神楽
馬火焚や鐘倉山ハ星 月 夜

顔見世

顔見世やまききぬものハ五の川

神押

をち孝くき忠似てぬを禮をさす
事如(禮)の事如(礼)ハ
辨なき池を廻らば案内キ

鷹 鳥叫

區くや鷹の口和を新の舌
鷹あまそ二舌の袂と来しそ
鳥叫ひや海(吹込)玉星(の)

暖 鳥

草を()や()第()の 暖 鳥

寒 入 空 月

並く()新()始()ひぬ()ぬ()の()鳥

家並く精進するや空の入
空月や危下()む()ふ()納()屋()の()門
空月の極付もせぬす()き()け
空梅

寒梅 やをきわ()不()つきと()ま()む()ん()

志病快然

空梅 やを()割()ち()ら()ぬ()枝()た()ら()ぬ()

乳鯉

乳鯉の塩引やうふ眼は

沙走

下駄の齒を蹴りて灰の沙走を
る二日沙走の習をまうけり

首季佐

首季佐はくまのしんを殊縁に

大干を界中はくまのしんを

日本の武彦等はくまのしんを

くまのしんを

煤掃餅搥

首季佐や隅田沙一も二之杯

煤掃て休て考の掃除うや
形のよき餅を何れもき道來

大黒の槌をうとる

漬

やよ指一葉かえ橙、幸、

來ぬ答り他はもはなぬ餅

豆打挿枝

豆うちちや初まはやくハ凍し
さへんをさへ成たるや豆をうちちり
よさハくや蒲団の下に鬼の豆
さへ枝を程り一枯葉と葉をさり
年忌

聖志一の軒をさり一年忌をさ
顔よりさるやあらよと
年をさへ阿そむ急らぬとさる

女是るまでさる

梅ちとく一をさへ見ゆるさる
年市年取

ふと曾て世間を旅や年の市
尾中

不ちるさるさる
門地家

松さるのちけり
年忌

手の著て故つ日十たてて
手のむら紙をたし休めて
志波の月日一瞬にたれ
一踏ふ手の著つらちの之れ

朗詠

雑

推檀也えり跡を筆に枯もせり
梅止む新課せりふ事のりち
頂の白帯きいんせに山影の山

ち空のとりまをいりふるは
松島やらぬさくまを夢にあらは
そなたのたえらえらまを佐の海
廻山
棧や雪も 柱乃りちあま

用乃或河に近西桃崎の
崎人より土竹跡に象
浮庵より多くひ

精神の狂の母とある

抄すりしるる 志しのの 志しのの

自然に形も色も
見当り成るなり
一に此中をよるは
志ある事あらざる
尤もその理たる月の

光ると海は乃白ひ
五七五も本は
ものたるなり

後持院権僧正格者



長年所為の書

